

01

パウダーテックの これまでとこれから

Contents

パウダーテックのこれまで	
パウダーテックの真髄、ここにあり-----	04
社会の変化に応え続けた、技術の進化と挑戦の軌跡----	05
パウダーテックの現在	
電子写真用キャリアで世界をリード-----	07
パウダーテックの強み	
創業から現在へと受け継ぎ、築き上げた強み-----	09
パウダーテックのこれから	
パウダーテックのパーパス-----	11
社員座談会-----	12

――パウダーテックのこれまで――

パウダーテックの真髄、ここにあり

パウダーテックは、1952年に「北陸化工株式会社」として創業しました。

社名や事業の形は変わっても、技術を追い求める姿勢と、お客様の期待に応えたいという思いは、
今も変わらず受け継がれています。変化を重ねながらも、その芯にある価値観こそが、
私たちのものづくりを支える力となっています。

鉄粉という小さな粒に、 技術と未来の可能性を 託してきた

1952年、輸入品が市場を独占していた時代に、日本初の国産鉄粉メーカーとして当社は創業しました。鉄粉の将来性を見据え、研究と設備投資を重ねて製造技術確立し、多様な製品を展開。中でも高い活性度が評価された鉄粉は、使い捨てカイロに広く使用され、市場の旺盛な需要に応えてきました。



数々の困難に直面しながらも 決して諦めず、 新たな価値を生み出してきた

鉄粉事業は、厳しい価格競争や設備の老朽化といった困難に直面する中、周辺環境への配慮から、柏工場での製造終了を決断し、仕入販売へと移行しました。こうした変化の中でも、鉄粉で培った技術を応用し、フェライトキャリア製造を軸とする事業へと進化を遂げています。

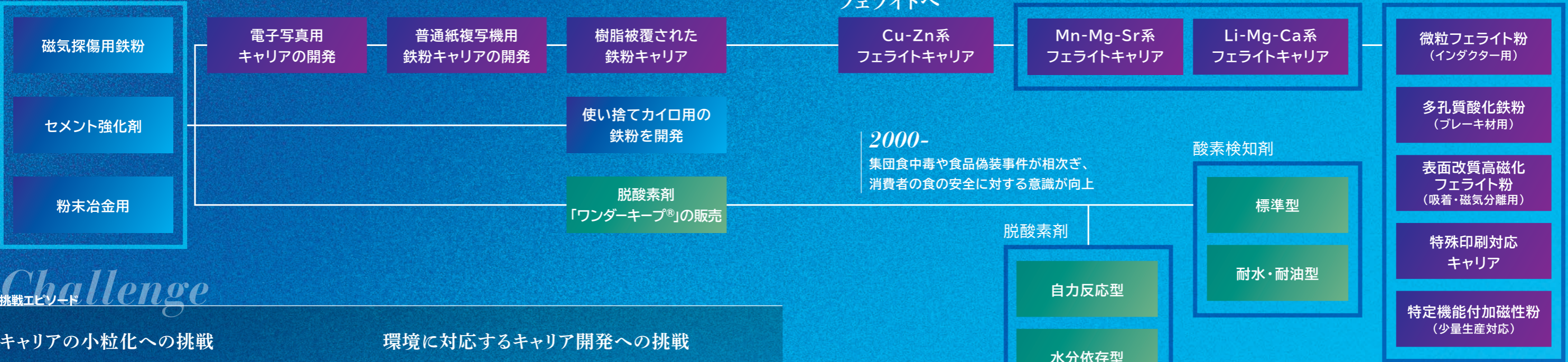
社会の変化に応え続けた、 技術の進化と挑戦の軌跡

パウダーテックは、社会の変化やお客様の期待に応えるため、創業以来、粉体加工技術を磨き続けてきました。その技術は、コピー機や印刷機に用いられる電子写真用キャリアや、脱酸素剤など多様な製品分野へと展開され、当社の成長を支える原動力となっています。

売上高



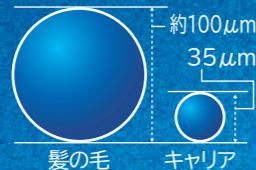
鉄粉の種類・用途



Challenge 挑戦エピソード

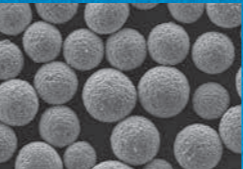
キャリアの小粒化への挑戦

電子写真の「高画質化」に伴い、トナーの小粒化が進む中、キャリアにも小粒径化が求められました。画像品質の面では、粒径分布を狭める必要があり、小粒径で狭い粒度分布を持つキャリアを、低コストで大量に供給する技術が求められました。当社は製造工程の見直しと新たな製造技術の導入により、平均粒径 $35\mu\text{m}$ のキャリア量産化を実現。電子写真技術の進化に応じた技術革新を果たしました。



環境に対応するキャリア開発への挑戦

米国における重金属廃棄物規制の強化を受け、フェライトに不可欠なCu、Ni、Znを含まない組成の開発が求められました。磁化を高めるだけでも容易ではなく、電気抵抗や表面性の制御など多くの技術的課題がある中、1993年に結成したプロジェクトチームを中心に、総力を挙げて完成した環境配慮型製品「EFキャリア」は、生産技術の進化を重ね、今も当社を支える主力製品です。



電子写真用キャリアで世界をリード

パウダーテックは、電子写真用キャリアや新規機能性材料の

開発・製造・販売を行う機能性材料事業と、脱酸素剤「ワンダーキープ®」、

酸素検知剤「ワンダーセンサー®」などを展開する品質保持剤事業の二つを柱としています。

中でも電子写真用キャリアはグローバルで約70%のシェアを占めています。

機能性材料事業

鉄粉製造で培った技術を発展させ、コピー機や印刷機に使われる電子写真用キャリアの開発・製造・販売を行っています。素材をフェライトへ転換し、高画質化と高耐久性を実現。更に環境規制や高性能化要求に対応した重金属

を含まない新たな組成で小粒径・狭粒径分布のキャリアを開発しお客様に販売。そして、キャリアを支える5つの技術「組成設計」「造粒」「焼成」「分級」「樹脂被覆」を磨き上げ、新規市場向けの機能性材料に展開しています。

電子写真用キャリアとは

コピー機や印刷機で使用される磁性粉体で、画像を形成するため、トナーと呼ばれるインクを安定的に運ぶ役割を担っており、高画質化にも貢献しています。その役割から「キャリア」と呼ばれています。

主な開発技術・素材ラインナップ

粉体技術を生かし、ミクロンレベルの粒径調整や組成設計等により、多様な特長を持つ素材を開発しています。



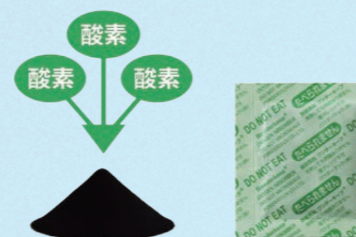
品質保持剤事業

食品の安全を守り、食品ロスを減らして社会に貢献する品質保持剤関連製品を取り扱っています。包装内の酸素を除去し、菌の繁殖を防ぐ脱酸素剤「ワンダーキープ®」、

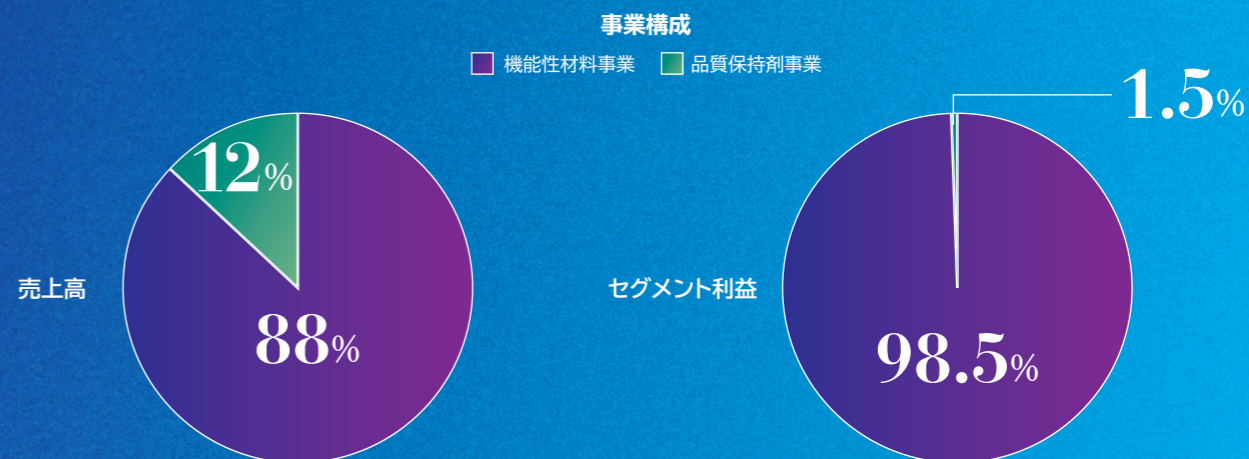
酸素の有無を色で知らせる酸素検知剤「ワンダーセンサー®」などを販売。製造はグループ会社の株式会社ワンダーキープ高萩が担っています。

「ワンダーキープ®」に鉄粉はどのように生かされているか？

「ワンダーキープ®」は、鉄が空気中の酸素と結合する化学反応、いわゆる「錆びる」現象を利用し、密閉空間内の酸素を効果的に除去しています。これは発熱を伴う反応でもあり、同じ仕組みは使い捨てカイロにも活用され、パウダーテックが長年培ってきた鉄粉技術は、このように日常生活に身近な分野でも役立っています。



数字で見るパウダーテック (2025年3月末時点)



設立から

59周年



フェライトキャリア製品数

104銘柄



電子写真用キャリアの
グローバルシェア※1

約70%



※1 自社調べ

売上に占める開発投資額の比率

6.2%



従業員の平均勤続年数(単体)

17.4年



お客様との取引年数(最長)

57年



製品の輸出国数

12ヶ国



特許数※2

国内:132件
海外:173件



全従業員のうち
研究・開発職の比率(単体)

14%



※2 2025年9月24日調べ

創業から現在へと受け継ぎ、築き上げた強み

パウダーテックは、創業以来、技術を継承しながら進化を重ねてきました。

その歩みを支えてきたのは、従業員一人ひとりの高い探求心と、お客様の期待に応えたいという強い意欲です。

世代を超えて受け継がれてきた技術と企業文化を礎に、私たちはこれからも、更なる成長を目指していきます。

Q1

パウダーテックの強みといえば
何でしょうか。



粉体に関する独自技術と
お客様と共に創る提案力

私たちが開発する電子写真用キャリアの強みは、コア※1とコート※2双方に関する独自の技術力です。コアは大きさや表面性、密度、磁化などを調整でき、コートは多彩な材料や装置を活用し、要求される特性を実現し提供しております。加えて、技術だけではなく、お客様の課題や使用方法等を深く理解し、粘り強く寄り添いながら提案を重ねていく姿勢も私たちの強みだと感じています。「こんなものが欲しい」というご要望に真摯に向き合い、一緒に製品をつくり上げていく。その積み重ねが、今のパウダーテックを形づくってきたと実感しています。

これからも、培ってきた技術や知識を継承し、更に磨きをかけながら、お客様に選ばれ続ける製品づくりを目指していきます。

※1 コア：電子写真用キャリアの樹脂被覆のない部分
※2 コート：コアに樹脂を被覆した部分



開発本部 第3開発室
マネージャー
佐久田 綾

Q2

なぜ、技術を高めて
これたのでしょうか。



お客様の要望に
全力で応える文化

当社が技術を高めてこれた背景には、お客様の声に全力で応えようとする文化があります。社内では開発・製造・営業が密に連携して、かつ的確に対応する体制を整えてきました。

例えば、品質の分野では、脱酸素剤と酸素検知剤を別々に封入する手間を減らしたいというお客様の声を受け、両者を一体化した製品を開発・提供したところ、高い評価をいただきました。更に、技術サービス室を設けることで、商品に最適な脱酸素剤を提案し、安心して使っていただける体制も整えています。

こうしたお客様の期待に応える姿勢は、部署を越えた当社ならではの強みだと感じています。



営業本部 WK営業部
主任
稲村 卓士

Q3

なぜ、そのような文化を
築くことができたのでしょうか。



一人ひとりの強い探求心と
挑戦への意欲

私たちの職場では、「どうすればもっと良くなるか」を常に意識しながら、日々の業務に取り組んでいます。現場・現物・現実を確認しながら職場ごとに改善策を考える「グループ活動」を通じて、歩留まりの向上や作業の効率化に向けた工夫を積み重ねています。

また、生産技術や開発など、他部署と連携して課題に取り組む機会も多く、立場は違っても同じ目標に向かって協力する一体感があります。

こうした環境の中で、一人ひとりが課題に向き合い、探求する姿勢を大切にしてきたことが、当社の文化の根底にあると感じています。私自身も、そうした姿勢を持ち続けることで成長を実感でき、やりがいにもつながっています。



生産本部 製造部
係長
辻 進一郎

Q4

なぜ、従業員は探求心と
意欲を高めてこれたのでしょうか。



挑戦を後押しし
意欲を引き出す環境と風土

当社には、疑問に思ったことや新たに挑戦してみたいことがあれば、前向きに取り組める環境があります。改善提案を常時受け付けていたり、定期的な上長との面談があったりと、従業員の向上心やチャレンジ精神を大切に作る風土が、職場全体に根付いていると感じます。

私自身、英語に対して苦手意識があり、海外のお客様や子会社とのやり取りに課題を感じていました。そうした中で、スキルアップの一環として、これまで前例のなかった語学研修プログラムが導入され、参加の機会をいただきました。

このように、挑戦を後押ししてくれる環境があるからこそ、一人ひとりの探求心や意欲が育まれているのだと感じています。



営業本部 CP営業部
営業担当(国内外対応)
山本 修也

パウダーテックのパーパス

“技術の一粒” 小さな粒から、未来につなぐ

お客様へ のメッセージ

1. 私たちは、粉体の専門技術と創造性によって、新たな価値を提供します。
2. 私たちは、豊富な知識をもとに、お客様の課題をスピーディに理解し、解決します。
3. 私たちは、誠意をもって、高品質な製品を提供し続けます。

社会へ のメッセージ

私たちは、微小な粉体技術を通じて、
地球環境、地域社会、人々の生活に、
“目に見えるかたちで”貢献します。

社員へ のメッセージ

1. 私たちは、
縦横無尽なコミュニケーションで、
部門を越えて協力し合います。
2. 私たちは、多様な個性を尊重し、
共に成長し合う文化を育てます。
3. 私たちは、積み重ねた経験を胸に、
プライドをもって挑戦し続けます。

社員座談会

「技術の一粒」に込めた想いと、 その先に描く未来

パウダーテックは中長期的な成長を見据え、2024年度にパーパスを策定しました。
社内でプロジェクトを立ち上げ、部門や世代を越えて選ばれた
社員7名と事務局1名が議論を重ねて決めたものです。
今回の座談会では、策定に至るまでの議論や言葉に込めた想い、
これからの目標についてプロジェクトのメンバーに語っていただきました。

プロジェクトメンバー

技術と誇りを、 静かに灯す人 生産本部 製造部 佐藤 祐輔	現場に息づく、 変革の芽 生産本部 製造部 倉持 晶大	経験を還す、 次世代への灯 開発本部 第2開発室 山崎 謙	“人”と技術の 交差点に立つ 「共創者」 開発本部 第3開発室 與後 薫
未来の スタンダードは、 提案から始まる 営業本部 FM営業部 小島 隆志	現場でしか、 描けない未来がある 営業本部 WK営業部 野寺 洋平	しなやかに、 組織をつなぐ風 管理本部 経営管理部 上野 里歌子	ゼロから描く、 会社の羅針盤 管理本部 経営管理部 幸田 達彦

パーパス策定までの道のり

2024年7月3日 キックオフ	24年7月初旬～ 中旬 チーム ビルディング	24年7月中旬～ 下旬 現状認識に 関する議論	24年7月末～ 9月中旬 目指すべき 将来像に関する 議論	24年9月中旬～ 下旬 パーパスの策定
---------------------------	---	--	--	----------------------------------

2024年7月3日

キックオフ

未来のパーパスを、自分たちの手で プロジェクトの始動

幸田 2025年からの3年間を対象とする中期経営計画「25中計」の策定にあたり、当社では、3年先だけでなく、その先の将来像を描いた上で、今なすべきことを逆算して考えるという方針が共有されました。その中で、「パーパスを立てよう」という流れが生まれ、形式的な文言ではなく、意味のある言葉を社員自身が考えることになりました。そこで、部署や役職を越えてメンバーを募るプロジェクトチームが発足し、私は事務局としてその推進を担いました。メンバーは、各部門からの推薦で構成されました。

小島 お話をいただいた時は、経営の根幹に関わるようなテーマに参画することになり、「これは大変なことになったぞ」と身の引き締まる思いでした。とくに、「25中計」の初年度という節目に、パーパスを起点として中計をバックキャストで構想するという考え方を聞き、パーパスという言葉にどれだけの意味と重みを込められるのか、自分なりにしっかり向き合う必要があると感じました。

山崎 私はチームの中で最年長で、最初に参加の話聞いた時は、「こんな重要なテーマに自分が加わってよいのか」と迷いもありましたが、会社の将来に関わることであり、前向きに取り組もうと決意しました。

倉持 私も当初、「パーパス」という言葉自体に馴染みがなく、自分がどれだけの役割を果たせるのか、不安もありました。ただ、他部署と交流する機会は限られていたため、このプロジェクトは貴重な経験になると考え、参加を決めました。

上野 私は入社してから年数が浅く、また事務系の業務を担当しているため、これまで開発や営業といった他部署の方々と関わる機会は多くはありませんでした。緊張もありましたが、多様なメンバーと共に取り組む今回の活動は、貴重な学びになると感じ、参加しました。

24年7月初旬～中旬

チームビルディング

まずはお互いを知ることから。 信頼関係を築いた“カード対話”

幸田 パーパスには、メンバー一人ひとりが日々の仕事を通じて感じていることや、内にある想いをしっかりと込めたいと考えていました。そのためには、まず安心して自己開示できる関係性を築くことが不可欠だと感じていました。そうした中、以前NPOの活動で知った「エンゲージメントカード」というツールが、自己開示のきっかけとして非常に有効だった経験があり、今回のプロジェクトでも導入することにしました。これは、自分や相手が大切にしている価値観をカードで「見える化」し、それを共有することで、相互理解や信頼を深めることができるものです。例えば「創造性」「変化」などが書かれたカードの中から、自分にとって重要だと思う価値観を選び、選んだ理由と共に他のメンバーに伝えました。

佐藤 エンゲージメントカードを通じて考え方を共有する中で、メンバーそれぞれが本当に多様な価値観を持っていることに気付かされました。仕事観や大切にしている姿勢について、ここまで深く話す機会はこれまでなかったので、長く一緒に働いてきたメンバーに対しても、「そう考えていたんだ」と新たな発見がありました。



野寺 私にとっては、他部署の方とじっくり話すこと自体が新鮮で、自分の考えの偏りや会社の強みを客観的に見直す良い機会になりました。エンゲージメントカードを使って率直に話すことで、お互いの人となりも見えてきて、信頼関係が一気に深まったと思います。

與後 私も同じように感じました。また、相手の価値観だけでなく、各部署の仕事の進め方や考え方にも触れられて、理解が大きく深まりました。とくに印象に残っているのは、野寺さんの飛び込み営業のエピソードです。私の所属する開発本部では、基本的に事前にアポイントを取ってお客様と面談します。だからこそ、製品について何も知らないお客様のもとを訪れ、信頼を築き、受注につなげていく営業の姿勢には強い刺激を受けました。

野寺 もちろん、うまくいかないこともありましたが、お客様に納得していただき、注文につながった時の達成感は格別でした。

24年7月中旬～下旬

現状認識に関する議論

理想と現実の間で、 あらためて見つけた“らしさ”

山崎 これまで経営理念について、あまり深く考えたことはありませんでしたが、今回あらためて向き合ってみると、現実との間にギャップを感じる部分がありました。例えば「誠実を以て貫く」という言葉がありますが、その主語は誰なのか、何を貫くのが曖昧で、意味をうまく汲み取ることができませんでした。昔は、こうした言葉を掲げること自体に一定の価値があったのかもしれませんが、今はより具体性と納得感が求められる時代だと感じます。

経営理念

- 技術を以て社会の繁栄に貢献する
- 誠実を以て貫く
- チャレンジ精神、開拓精神に徹する
- 社会のニーズに迅速に対応する



與後 私も「技術を以て社会の繁栄に貢献する」という一文に対して、同じように距離を感じました。日々の業務の中で、社会への貢献を「目に見える」かたちで実感する場面はそれほど多くないと感じています。

幸田 だからこそ、パーパスの文言を決める際には、社会に対する「目に見える」貢献を明確に表現したい、という意見が出ましたね。

一方で、このプロジェクトを通じて、あらためてパウダーテックらしさに触れる場面も多くありました。例えば、社員一人ひとりの人柄や、顔と名前を覚えられる規模感もあってか、部門を越えた縦横無尽なコミュニケーションが自然と生まれやすいと感じました。

上野 私も同じように感じています。他部署の方との協力は自然にできますし、自分のことを気にかけて、声をかけてくださることもあります。そうした距離の近さやあたたかさは、働く上での魅力だと感じています。

小島 パウダーテックは、ニッチな分野に特化した企業です。だからこそ人と人のつながりが色濃く残っているのかもしれませんが、パーパスを考える上でも、こうした文化的な強みは生かしていきたいと感じました。振り返ったからこそ、あらためて気付けた良さだと思います。

24年7月末～9月中旬

目指すべき将来像に関する議論

変わりゆく時代の中で、 技術と働き方の可能性を探る

佐藤「15年後の2040年に実現したいこと」を考えた時、まず思い浮かんだのは、これまでの15年間でパウダーテックがどれだけ変化してきたかということでした。新しい工場が建ち、新たな製品が次々に生まれてきたように、これから先にも、今は想像もつかないような展開があるのではないかと感じました。一例ですが、野寺さんが担当している脱酸素剤の技術を、非常食などの新たな用途に生かすことで、今以上に食品ロスの削減につなげられないかと考えたのも、その一つです。

野寺 その話を聞いて、品質保持剤事業の展開にはまだ大きな可能性があるかとあらためて感じました。当社は粉体技術の中核に持っており、それを他分野に応用できる柔軟性があると実感しています。

小島 野寺さんのおっしゃるとおり、新規市場の営業を通じて、お客様からのニーズや業界の動向に触れる中で、既存の枠にとらわれずに当社の技術を生かす機会は、まだ数多くあると思

います。「次の世代に何ができるか」という視点を持ちながら、新たな可能性を模索していくことが、これからの自分の役割だと考えています。

山崎 このテーマを議論するにあたって、「電子写真用キャリアの市場が将来的に縮小するとしたら」という前提を置いてスタートしました。自分たちの存在意義を問われるような感覚もありましたが、実際の議論では前向きな意見が数多く出て、大きな可能性を感じる時間になりました。

與後 私は現在、電子写真用キャリアの開発を担当しています。市場全体はかつてほどの成長は見込めませんが、印刷そのものがなくなることはないと思っています。紙以外のパッケージ用途や他素材への印刷など、まだ活用の余地はあると感じています。また、「もっと働きやすい会社になりたい」という声も挙がり、DXの推進や多様な人材が働ける環境づくり、更には工場での熱中症対策など、具体的な改善のアイデアが活発に共有されたのが印象的でした。

倉持 私も製造の立場から、AIの導入などを通じて製造プロセスを効率化し、業務負担を軽減できれば、更に働きやすい環境がつかれると感じています。

上野 こうしたDXの取り組みは、部署ごとの対応ではなく、全社的な情報基盤として横断的に整えていく必要があると考えています。また、製造業という性質上、現場は男性が中心になりがちですが、今後は女性にとっても働きやすい職場づくりが重要だと感じています。現場で働く女性が非常に少ないという現状を踏まえ、より多くの選択肢や可能性が開かれる環境を整えていけたらと思います。

24年9月中旬～下旬

パーパスの策定

こだわり抜いたひとつ ——重なった想いが、 一つの言葉になった瞬間

幸田 最後の会議、残り10分というところで、一度は全会一致でパーパスが決まりました。ただ、その時のメンバーの表情には迷いがあり、「本当にこれでいいのか」という空気が漂っていました。腑に落ちないまま終わるわけにはいかず、急遽会議を30分



延長することを決断しました。プロジェクト全体を通じて、最も難しい瞬間だったと思います。この30分間で、全員が持てる集中力を出し切り、ようやく納得のいくパーパスが完成しました。その時は、30分前とは全く違う空気が流れていて、全員の表情が達成感と一体感に満ちていたのが強く印象に残っています。
與後 当社の代名詞となるパーパスが、プロジェクトに参加していない社員にもきちんと伝わるかどうか。私はその点を何度も自問自答していました。最初に決まかけた案では、「これが自分の会社です」と胸を張って言える姿が、どうしても思い描けなかったのです。

また、当社は技術とものづくりを軸に発展してきた会社です。社員一人ひとりが、自分の仕事に誇りを持っていて、その誇りは目に見えない部分にも確かに宿っていると感じています。粉の一粒一粒に当社の技術が凝縮されている。そうした思いを「技術の一粒」という言葉に込めました。

小島 その「技術の一粒」に続く「小さな粒から、未来につなぐ」という表現についても、細かな議論が重ねられました。「粒」にするか「粉」にするかで意見が分かれたのですが、「粉」は集合体としての印象が強く、一方で「粒」には技術の凝縮や光るイメージがあり、最終的には「粒」を選びました。「未来へ」ではなく「未来に」としたのも、広がりや可能性をより感じられる表現にしたかったからです。あの30分間は、一字一句にこだわり抜いた時間でした。

佐藤 「一粒」という表現には、製品に込めた技術や想いだけでなく、社員一人ひとりの存在も重ねています。私たちが手がけるのは粉体であり、その一粒一粒に技術が詰まっている。そして、社員一人ひとりが会社を支えているという意味も込めまし

た。こうした思いを、社内外に深く届けるために、メンバー全員で多くの案を出し合いながら言葉を磨き上げていきました。

倉持 同じ会社でも、部署によって業務内容は大きく異なります。とくに事務系の社員は製品に直接触れる機会が少ないため、抽象度が高すぎると伝わりにくいのではないかと悩みました。その点も含めて、表現には細心の注意を払いました。

野寺 それでも今回は、開発・製造・管理など、さまざまな部門からメンバーが集まったからこそ、全社にとって受け入れやすいパーパスが生まれたと思います。

上野 それぞれが強い想いを持っていたからこそ、まとめるのは簡単ではありませんでした。でも、だからこそ、最後に言葉が定まった時の達成感はとても大きかったです。

山崎 私も同じ気持ちでした。何度も議論を重ねる中で、それで意見が分かれていたものが、ある瞬間にすっと一つにまとまり、「これしかない」と確信できた。必要なピースが少しずつ見えてきて、それが最後にぴたっとはまった時の感覚は、今も鮮明に覚えています。チームとして一つの言葉にたどり着いたという実感があり、あの瞬間の一体感はこれまでにない経験でした。

今後について

このパーパスを未来へ。 想いをつなぎ、かたちにしていく

上野 これからは、せっかく策定したパーパスをその場で終わらせるのではなく、社内外にしっかりと根付かせていきたいと考えています。また、部門横断で集まった私たちの想いが、未来の社員にも確かに受け継がれていってほしいと思っています。

そして、この言葉が、今後新しく入社する方々にとっても「自分がパウダーテックで働く意味」を見つけるきっかけになればと願っています。そうした想いが少しずつ広がっていくことで、会社全体の力にもつながっていくのではないかと思います。

小島 私も同じ思いです。社員一人ひとりがこのパーパスを通じて、それぞれの仕事で力を発揮し、輝けるようになることは、非常に意義深いことだと感じます。私自身も、新規機能性材料の営業として、将来的にキャリア並みの世界シェア70%を目指せる製品を生み出せるよう、挑戦を続けていきたいと思っています。

野寺 技術という点では、ただ守るだけでなく、社会のニーズに応じて「進化させていく」姿勢が不可欠だと、今回のプロジェクトを通じてあらためて実感しました。

また、社内の働く環境についても多くの意見が交わされました。例えば、性別や年齢に関係なく、多様な人材が能力を発揮できる会社であるためには、制度や仕組みだけでなく、社員同士の理解やサポートの積み重ねが欠かせないと感じています。そうした意識を共有しながら、自分も働きやすい環境づくりに関わっていきたいと思います。

倉持 今回の議論を通して、望ましい職場環境は部署によって異なるということをあらためて実感しました。製造部に限らず、全社員にとって働きやすい環境づくりを目指し、これからも協力しながら改善に取り組んでいきたいと思っています。

與後 多様な部署のメンバーと話し合う中で、「部門を越えたコミュニケーションの活発さ」が当社の強みだと再認識しました。製品を形にしていくには、社内のさまざまな部署との連携が欠かせません。今後もそうした連携を生かしながら、高性能で付加価値のある製品づくりに取り組んでいきたいと思っています。また、機会があれば、新しい分野の開発にも挑戦していきたいです。

山崎 そうした挑戦を広げていく一方で、次の世代に伝えていく役割も大切だと感じています。これまでは、自分の知識や経

験を蓄積することに重きを置いてきましたが、今回のパーパス策定を通じて、それらを若い世代に継承していく責任を実感しました。今後も学ぶ姿勢を持ち続けながら、自分の経験や想いを伝えることが、今の自分にできる貢献だと思っています。

佐藤 私も、当社が持続的に発展していくためには、技術の継承が不可欠だと感じています。「技術の一粒」という言葉にもその想いが込められています。私は世代の中間にあたる立場として、これまで会社を支えてこられた方々の知見や技術をしっかりと受け継ぎ、次の世代へ橋渡ししていく「つなぎ役」として、その責任を果たしていきたいと思っています。

幸田 技術の継承が未来への橋渡しだとすれば、それを支える土台を築くこともまた、大切な役割だと考えています。開発が価値を生み、製造がそれを形にし、営業が社会やお客様に届ける。この一連のバリューチェーンを、私は管理本部の立場からしっかりと支えていきたいと思っています。今回のプロジェクトのように、部門の垣根を越えて協力し合うことで、組織としての力はより大きくなると実感しました。これからも、自分なりのかたちで、パウダーテックの未来を支えていきたいと思っています。そして、プロジェクトで生まれたこの言葉が、社員一人ひとりの判断や行動の拠り所となり、変化の時代においても、揺るぎない共通の価値観として根付いていくことを願っています。

策定した パーパスへの 共感



代表取締役社長
丸山 憲行

当社の根幹である技術というワードを、今回初めて策定したパーパスに魂として刻んでもらえたことに対して深く共感しました。事業環境が大きく変化する中で、当社も変化し続けることを社員一同が認識した上で、新しいことにチャレンジしていきましょう。



取締役
常務執行役員
板越 剛

社員、お客様、社会へのメッセージを込めたものであり、また“技術の一粒”と、特定材料に特化している当社に無限の可能性を示唆してくれていたことに共感しました。この私たちのパーパス実現に向けて社員の皆さんと共に挑戦し続けることを誓います。



取締役
執行役員
小林 弘道

掌の上の小さな粒から遠い未来に視線を向ける、そんな動きを感じさせる表現に心惹かれました。そこには、前向きな姿勢や、拳を握り締め何度でも立ち向かうチャレンジ精神を強く感じます。全社一丸となって前を向いて進んでいくよう頑張りたいと思います。



常務執行役員
開発本部長
植村 哲也

私はこのパーパスから粉ではなく粒で価値創造を目指すというチャレンジ精神と、当社は技術を以て未来に貢献するという意志を感じました。最初の一步として社員の皆さんもパーパスに込められたメッセージやありたい姿をぜひ考えてみてください。



執行役員
生産本部長
高木 一徳

“技術の一粒”は技術が集結された特別な粒をイメージしやすく、自社らしさがあり、社内外に伝わる言葉であると思います。未来へ技術を発展させるために知識やノウハウを共有、融合させていくにはどうしたらよいか考えながら、会社の存在意義を感じて小さな粒で社会貢献する——そんなメッセージが感じられとてもよいと思います。



執行役員
営業本部長
石井 誠

プロジェクトメンバーの皆さんが自ら言葉を紡ぎ出したパーパスは、一つひとつの技術、一人ひとりの努力の積み重なりであるという当社の本質を見事に言い表し、私は深く共感しました。この言葉が全社員の心に根付き、未来を切り拓く力となることを心から願っています。



執行役員
管理本部長
宮岡 克寿

パーパスを目にすると、プロジェクトのメンバー全員が3カ月の間、最後の最後まで熱い議論を重ねていたことが鮮やかに記憶によみがえります。メンバーには、皆さんの想いの結晶であるこのパーパスを、これからは「伝道師」となって社内へ広めていただくことを期待しています。



常勤監査役
浦山 茂樹

このパーパスは、当社の誇るべき固有技術である粉体技術の可能性に着目した素晴らしいものです。製品は小さな粒ですが当社の技術の結晶であり、さまざまな用途に用いられ豊かな未来を創造するコアとなります。社員の皆さんが誇りを持って業務に邁進されることを期待しています。